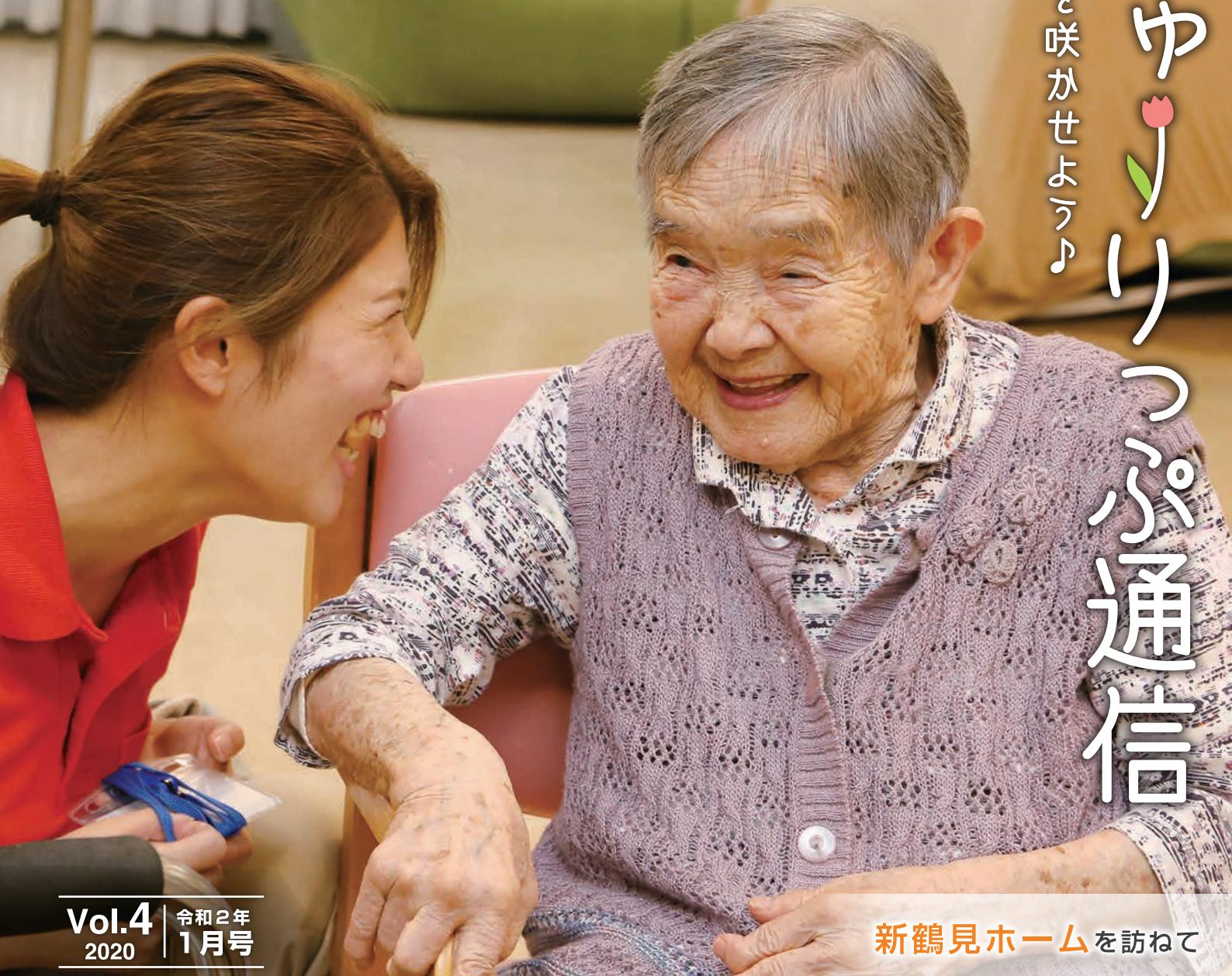




ちゅ~りつぶ通信

笑顔を咲かせよう♪



Vol.4 | 令和2年
2020 1月号

新鶴見ホームを訪ねて

特養として市内最大規模の施設。
数多いスタッフの力を活かし、お客様への
きめ細かいサービスを提供したい。

令和2年の今年、開所20周年を迎える新鶴見ホームは、横浜市福祉サービス協会が運営する市内3カ所の特別養護老人ホームの中でも最大規模の施設で、本館と新館をあわせ333人のお客様が入所されています。要介護度は本館で4・3、新館で4・0ほど。介護保険制度開始に合わせて作られた施設で、特養のほかにもショートステイ、デイサービス、認知症デイサービス、居宅介護支援のサービスを提供し、介護福祉士を中心としたスタッフの数は297名を擁する大所帯です。

横浜市の中でも人口増が多い区のひとつである鶴見区にあり、近くにはマンションが建ち並び、小学校でも生徒数が増えてきているそうで、高齢者と子どもたちという世代のバランスがとれた活気のある土地柄といえそうです。

事務長の小山健介さんによれば、施設の規模に応じてスタッフの数が多く一人ひとりのお客様に行き届いたサービスが提供できるうえ、よりよい運営やサービスのためのアイデアがパツとたくさん集まるそうです。地域の人々と交流するお祭りなどの際には、スタッフ一丸となって運営するので、すごいパワーを発揮するのだとか。また専門知識と介護福祉士などの資格を身につけた意欲のある若手スタッフが多く、それぞれが高い能力とホスピタリティをもってお客様のケアに当たっているといいます。

大好きだった祖父の病気をきちんと理解して看取れなかつた体験が、介護福祉士になつた出発点。

毎日お客様に会えることが
楽しいです、うれしいんです。
毎日会つてお世話している
ので、自分のおじいちゃん、
おばあちゃんみたいで、好き
になつてしまつ感じ(笑)。出
勤して家族に会えるような
気持ちでいます』。大好き
だつた祖父の病気をきちん
と理解して看取ることができなかつた檜山さんにとって
、いじ新鶴見ホームは、おじいちゃん孝行、おばあちゃん
孝行をやり直せる場でもあるのかわせん。

『この仕事が大変だ』といつ氣はもつたくしないで
すね。出勤してお客様に名前を呼ばれたり、待つて
たよと声をかけられたりすると本当にうれしくて』
と明るく語つてくれました。

働く職場環境についても、入社する前は職場での
人間関係を一番心配していたものの、とても風通し
のよい職場で、『先輩たちはみんな経験を積んで、能
力も高いすごい人たちというか、尊敬できる人ばかり
です。リーダーの方も親身になって話を聞いてくだ
さるうえ、仕事が終わってからも相談に乗ってい
ただける』と、仕事のやりがいに加えて、優れたス
タッフに囲まれている環境についても満足している
様子。今後の目標については、お客様本人とご家族
から信頼される介護福祉士になる努力を続け、『こ
の新鶴見ホーム』という特養で、最期をここで迎えて
よかつたなと思つてもりえるようにお客様の毎日の
生活を大事に支えていきたい』といいます。



97歳の吉田はるのさちは、横山美咲さんがお気に入り。「孫みたいな子が一生懸命やってくれるからうれしい」と喜んでいました。

自分にできる」とは微々たるものかもしない。しかし、そのなかでも全力を尽くしたい。

若手でありながらコーチトレーダーを務める鈴木
翔貴さんにも話をうかがいました。鈴木さんは福祉
の専門大学で心理学を学び、卒業して最初は障がい
がある人の機能訓練をサポートしていく職場に勤
めたといいます。そのためお客様の逝去、看取りも
ある特養の仕事には当初とまことに覚えたことも
あるそうです。

『実際ケアしていただいたお客様がお亡くなりになつたときは、ぼくもちよとショックを受けました。仕事とはじえ、人の生死にかかわるとはいつづついとかと思ひました』。ただ、生死にかかわるからこそ、人の生をよりよくするために、自分に何ができるのかといふことを真剣に考えたそうです。

『人は誰しも平等に命がつくるものでし、それを迎える場所であるわけですから、最期の花道でないんですけど、ご本人がその人らしく生きて亡くなつていいけるためにどうすればいいか。ご家族との関係をしつ

かうのへんこせなが
の着ていかなくて
はなれなう。ほくに

「できることは微々たるものでしきょうけども、そのなかでも全力をつくした!』。

現場の仕事は楽し
いですよ、といつ鈴

木さん。『(ご)年配の方と接してじる』と、何よりも『得るもの』た
くさんあり、ときおり戦争
だけでなく、得るものもた
べて感じる』と感じるのであります。

体験の話などを聞くと勉強
になる』と感じるのであります。
現在はユニットリーダーと
いう立場であるため一般の

介護福祉士のスタッフより、やはり全体を見ること

が求められ、やるべきことを整理しながら目標を掲
げ、トライアンドエラーで取り組んでいるそうです。
まだまだ勉強中ですと謙虚に語る鈴木さんですが、ユニットの職員が十分に能力を發揮して働くた
めにどうすればよいか、ユニット全体が潤滑にいく
よう、他のユニットとの調整もはかりながら、最終的
にお客様によりよいサービスの提供につながるよう
にしていきたいと考えています。

現場の仕事に加え、ユニット全体を見ながらの仕
事は大変ですが、その責任や勉強もまた楽し
いと感じます。『福祉の仕事はすじよく好きな
ので、苦になりません。仮にもし辛くなつたら、その
ままでは仕事というのは続けられるものではない
と思います。自分で楽しみとやりがいをもつて働く
方がモチベーションもありますし、おこがましい
でしきども、ユニットリーダーという立場で自分の
テンションが下がつたら周りにも悪影響が出
ますしね』ときつぱり。こうしたユニットリーダー
やスタッフたちの高い意欲が、新鶴見ホームに広
がる明るい雰囲気を作っているようです。



鈴木翔貴さん。現場を大事にしながらユニットリーダーとして率先して動いている。

インドネシアで看護師としての経験を積み来日。日本では介護福祉士としてお客様に寄り添う。

新鶴見ホームには外国籍スタッフも在籍して活躍しています。ダンタさんもそのひとりで、EPA（経済連携協定）に基づいてインドネシアから来日し、10年前から横浜市福祉サービス協会で介護福祉士として働いてくるとのことです。

インドネシアにいたときは看護師の資格を持つてクリークで働いていたそうですが、その経験が、日本に来ても役に立つていています。

『クリークは皮膚科でしたので体はお元気な患者さんたちが多く、ここではじめ高齢で体力もない方が多いです。でも、人が相手という点では看護師も介護福祉士も同じです。人と接することが好きな私はとてもやりがいのある職場です。心がけてじる』こと、大事にしていることは、やはり心をこめて接すること。お客様が安心してくださるよう、コミュニケーションをしっかりとて信頼関係を築けるようにしてします』

と明るく上手な日本語で話すダンタさん。とはいえる日本語には最初は苦労して、介護福祉士として働き始めても語彙が足りないと感じたので、新



いろいろ聞いて助けてもらひたといいます。『介護の勉強と同じく、日本語の勉強を一生懸命しました。そのためには介護福祉士の本だけでなく、テレビを見て言ひ回しや早口に慣れるようにしました。日本語の小説なども読んで、言葉の使い方も勉強しました。わからないところがあちこちあるのですが、辞書で調べたり、難しい介護の専門用語とかは介護現場のみなさんに聞いて覚えました。私が努力したというより、職員のみなさんのおかげです』と、微笑みながら謙虚に語る。これからも日本での介護現場で働き続けたいというダンタさんの夢は、あくまで介護福祉士としての仕事をしっかりとやり続けること。

『日本は来る前から、すじい国と思っていました。EPAというきっかけがあつて来日しましたが、実際に来てこの国で見ても、日本はいろいろな面ですじい国だと思います。その国で介護を学び続け、じぶんを込めてケアしていきたい。お客様との信頼関係ができると、どんどん私を呼んでくださるので、それがなによりうれしい』と明るく語るダンタさん。お客様との信頼関係をなにより大事にするその姿勢は、新鶴見ホームの理念とも重なりますようです。



丁寧な日本語で話すダンタさん。お客様だけでなくスタッフからも慕われている。

鶴ヶ峰地区

地域交流の場『中田カフェ』を立ち上げた生活支援コーディネーターにお話を聞きました！



鶴ヶ峰地区で地域力フエを立ち上げた鶴ヶ峰地域ケアプラザの生活支援コーディネーターの高橋大輔さん。地域での参加者も増え、評判も上々のようです。こうした場を作るに至った経緯を、ご本人に聞いてみました。

『鶴ヶ峰地区の西川島町中田町内会というエリアですが、この町内には商店もなければ「ンビ」もなく、買い物などは駅まで歩いて行くしかないところなのです。そんな様子を見ていて、みんなが気軽に出来かけられる居場所があるといいのではないかと思い立ち、町内会長さんとも話し合って、まず住民アンケートを実施し、みなさんの声を聞くところからスタートしたのです』と高橋さん。

高齢世帯だけでなく、子育て世帯にも意見を聞いてみようと、アンケートの対象を幅広くしたところ、地域の集いの場がほしいという声が多く、370世帯のうち70人以上が居場所を求めていたといふ結果に。町内会の役員さんたちにも地域力フエを作つてみませんかと提案したそうです。

『場所は町内会館があるので確保できるのですが、運営をどうするかについては少し悩みました。そんなとき「まどか工房』

という障がい者の地域作業所があり、運営協力をお願いしたところ快諾を得て「中田カフェ」として平成30年6月からスタート』。幸い、居心地のよさや気軽さが受け、さまざまな世代の人々が訪れる場所になつてます。

ケアマネジャーから生活支援コーディネーター、そして社会福祉士という資格も持つ高橋さんの今後の目標は、「高齢者がどんどん増えていく時代です。介護保険というものもありますが、それだけではできない部分を、地域の方々に協力してもらい、一人ひとりの高齢者が安心して暮らせる、誰かの目が必ず届いているような地域作りをすること』。熱意あふれる高橋さんの活躍がこれからも楽しみです。



鶴ヶ峰地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター
社会福祉士 高橋大輔さん

介護者のための相談電話

介護に疲れたとき…ほっとライン

介護に疲れて行き詰まつたり、不安になつたりしたとき、ひとりで悩まないで、ほっとひと息ついてみませんか？

045-227-1718

※受け付けは年末年始および祝日を除く月曜～金曜の8:45～12:00／13:00～17:15まで。ご相談の秘密は厳守いたします。

協会の理念

- お客様の満足
- 人を大切にし共に育ちあう企業風土
- 公正で透明感のある企業倫理

「お客様相談室」をご利用ください

「お客様相談室」では、事業やサービスについてのご意見やご要望をお受けしています。まずはお気軽にご相談ください。

0120-701-782 FAX 045-227-1721

社会福祉法人 横浜市福祉サービス協会

〒220-0021 横浜市西区桜木町6丁目31番地 6階

045-227-1700 FAX 045-227-1701
ホームページ <http://www.hama-wel.or.jp/>